

しよっぱい

夕陽

神田茜

Kanda Akane

講談社





しよっぱい夕陽

神田茜

KANDA AKIHO

講談社

神田 茜 (かんだ・あかね)

北海道帯広市生まれ。1985年に講談師の二代目神田山陽門下に入門、95年に真打に昇進。2010年に『女子芸人』で第6回新潮エンターテインメント大賞受賞。著書に『好きなひと』『ふたり』『ぼくの守る星』などがある。

しゅっぱい 夕陽ゆうひ

二〇一四年一月二五日 第一刷発行

著者—神田 茜かんだ あかね

© Akane Kanda 2014, Printed in Japan

発行者—鈴木 哲

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一〇八〇〇一

電話

出版部 〇三―五三九五―三五〇五

販売部 〇三―五三九五―三六二二

業務部 〇三―五三九五―三六一五



印刷所—凸版印刷株式会社

製本所—大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書のコピー、スクリーン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスクリーンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸ビース出版部宛にお願いいたします。

ISBN978-4-06-219227-9

N.D.C.913 222p 19cm

しよっぱい 夕陽

目次

エフの壁

5

肉巻きの力

51

バナナの印

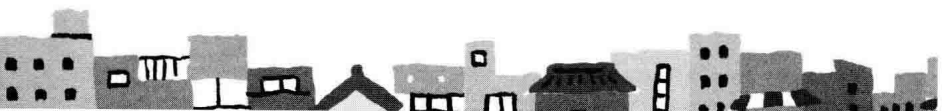
93

もえぎの恋

133

かみふぶきの空

181



しよっぱい 夕陽

目次

エフの壁

5

肉巻きの力

51

バナナの印

93

もえぎの恋

133

かみふぶきの空

181

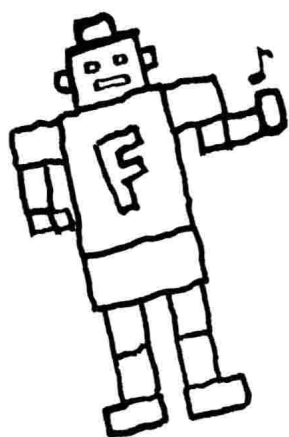


装幀 bookwall

装画 なかむらるみ

し
よ
っ
ぱ
い
夕
陽

工 フ の 壁



「たまにはオムレツにしてみる？」

キッチンで背を向けたまま、妻はまたそんなことを言う。

「いや、目玉がいいよ」

フライパンの中で水分がはじけ、ぱちぱちと蓋のうらに当たっている。

この音を聞きながら朝刊をひらくのが日課だ。

記事には「おやじバンド急増中」とある。中学や高校でギターやドラムをやっていた連中が中年になり、再び仲間を集めてバンド活動を楽しんでいるそうだ。

あのころ輝いていたやつらが、この期に及んでまだモテようとしているのか。楽器にさわったことも、モテたこともない僕にはまるで縁のない話だ。

「ちょっと焼きすぎかしら」

「いや、ありがとう」

妻が置いた皿を傾けて、目玉焼きを茶碗の白飯に載せ醤油をかける。箸でかき混ぜて、焼海

苔でひと口ずつ包んで食べる。あとは豆腐とネギの味噌汁。七、八年前から毎朝これにしてもらっている。四十代の胃袋は同じであることに安心する。

「ねえ、ヒロさんの下着買うんだけど、ヒートテックにする？」

「まだ新しく買わなくていいよ」

「もう、着たおしたわよ。安いんだから、買い替えたほうがいいの」

「じゃあ、今と同じのがいい」

「そう？ 新素材が出てるのに」

着るものも同じほうが落ち着く。若いころは流行りを気にしても、この年になると馴染んだものが一番だとわかる。食べるもの着るもの、生活すべてが同じほうがいい。

妻だってそうだ……。

五歳年下の秋恵との結婚生活は二十年になる。ここに来て壁にぶち当たってはいるが、いろいろあってもやはり同じ生活をしていたい。そのほうが心身のためにはいいはずだ。僕の頭の中がまだ散らかっているから、安定にすがっているだけかもしれないが。

結果的に妻の浮気がわかってよかった。

実際にはまだ「よかった」とは思えない。そう思えることをゴールに据えてあれこれ理由づけをしているところだ。「それがなければ、僕は人生を振り返ることもなかった。そして自分に欠けているものが、こんなに大きかったことにも気づかなかった」と、そんな理由づけだ。

「悟志は防災訓練で、学校に泊まるんだって」

「ああ、そう」

「私はお母さんの様子見に、出かけるかも」

「うん」

妻の浮気がわかったからといって、半年ものあいだ悶々としていただけで、妻を問いつめたり男の所に怒鳴り込んだりしたわけでもない。離婚にむけて興信所に頼んで証拠を集めることも、弁護士への相談も、財産整理もしていないから、これからも人生は変わりなく続くだろう。

「じゃあ、行ってきます。ゴミ、持っていこうか」

「ありがとう。玄関に出してあるから」

「うん」

「あ、カラスよけネットからはみ出さないようにね。行ってらっしゃい」

変わらぬ妻である。変わったのは僕の頭の中だけで、あとはすべてこれまでと同じように公務員の僕と主婦の妻、高校生の息子がいる平凡な家庭でしかない。せめて見た目だけでも同じでいたい。このままでいられるのは、あと十年ちょっとかもしれない。定年後に妻が僕の元を去ったとしても、ぎりぎりまで今の生活を変えたくはない。

それが僕の出した結論なのだ。

あと二年で五十だ。平均寿命を考えると人生の半分以上どころか三分の二近くは過ぎて、残

りのほうが少なくなってしまった。五十歳からの十年間など、子どものころの半年ほどの感覚しかないのかもしれない。そのくらいここ数年は早く過ぎた。

正月が終わったと思ったらもう新年度。ばたばたしているうちにもうお盆休み。涼しくなったと思ったらもうクリスマスだ。正月のお笑い番組を観ると、去年の正月とあまりにも記憶が近くてデジャブかと錯覚する。つい最近、夢の中で観たような感覚だ。

ゴミ袋を手には、白い塗料の剥げが目立つ門扉を閉めた。退職金で返済できるからと実家の近くに建てた小さな家は、妻の希望で壁はモスグリーン、窓枠や柵、門扉は白く塗ってある。十年しか経っていないのだから修理をして使えば妻の終の棲家にはなるだろう。それともこの家さえも妻は捨てるのだろうか。

家を建てた三十八歳のころ、僕もそんな年齢になったのかと感慨にふけた。そして気がつくとい、五十手前だ。脳内の意識は三十八歳とまるで変わっていないのに、タイムスリップしたように「オヤジ」と言われる年になっていた。とすると、これから六十手前、七十手前、八十手前と、ずっとデジャブとタイムスリップに驚きながら終わってしまいそうだ。まあ、長生きしたらの話だが。

「ヒロさん、待ってー、まだ、ゴミがあったわ」

扉の角のゴミ置き場まで、秋恵がサンダルで駆けてきた。

「あわてなくてもいいよ」

「ああ、そうね」

ゴミ袋を並べカラスよけネットを広げてふたりで被^{かぶ}せた。じゃあ、行^いってらっしゃいと秋恵は笑顔で手をふる。

僕の勘^{かん}などあてにならないが、あのころは匂^{にお}いがおかしかった。秋恵のつける香水の種類がそれまでの爽^{さわ}やか系ではなく、野性的な感じというか、とにかく大人の女の匂^{にお}いだった。年齢の変化で好みも変わるのかと我慢していたが、タバコの匂^{にお}いが混^まじっていることがあった。

僕はタバコを吸^すわないし、香水も好きなほうではないから、苦^く手な匂^{にお}いが混^まざってイヤな気分になった。そんなタイミングでのできごとだ。

日曜日の朝、秋恵は中学の友人グループで集まると言^いって出てい^いった。そのあと女性の声で電話があ^かった。いかにも親^{おや}しそうに「中学の友人の、中山^{なかつま}でーす」と。

「秋恵は今日は、中学のお友達と集ま^あるって言^いって出^でかけましたが、あれ、高校だったかな？ すいません、ちゃんと聞いてい^いなかったもので」と電話を切^きった。

帰^{かえ}ってきた妻に、何気なく電話のことを告^つげると、不思議なほどあわてた顔をした。

「ちがうの。中学の友達^{ともだち}って、あれよ、仲間割^われしててね、その子は嫌^{きら}われてたコ、だから、誘^よわなかったの。それだけよ」

わかりやすい焦^{あせ}り方^{かた}だったからよけいにおかしいと感じた。

それまで妻のプ^プライバシーを探^{たづ}ねたことなど一度もな^あかった。結^{むす}婚^{こん}したてのころから

友人の名前も覚えなかったし、誰と電話していいようが関心を持たなかった。疑いようがない女だったのだ。出会ったときからずっと。

公務員になって三年後、自動車教習所に通った。短大を出たばかりの秋恵もちょうど同じ時期に通っていて、授業の後に「いっしょに筆記試験の勉強して下さい」と声をかけられた。お互いに初めてつき合う異性で、二年間交際してから当然のごとく結婚した。夫の目からは、小太りで大人しい性格の彼女に女性的な魅力があるようには見えず、死ぬまで家族に尽くしてくれそうな良妻賢母型だと思っていた。

家族が寝静まった時間に起き、居間のテーブルに置いてあった妻の携帯を覗いてみた。これまで僕が何の疑いも持たなかったから、妻もまた全く警戒していなかったのだろう。携帯に口ックをかけておらず、見ようと思えばいくらでも……の状態だ。

送信済みメールに同じ宛先が並んでいて、それを開いた。

「中学生みたいに胸がいたくなるの。こんなオバサンが、おかしいよね」

ほっぺの赤らんだ顔の絵がつけられていた。

「今までの結婚生活って、安らぎはあったけど刺激がなかったのね。女ってワガママだと思わない？」

これには、ハートに矢が刺さった絵だ。

「もう会わないって別れて、一分後に会いたくなった。迎えにきて」

これにはなぜか馬の絵。

「楽しかったね」

これに、温泉マークだけというのもあった。

日付を見ると、去年の春からだ。もう一年以上たっている。あんまり沢山メールがありすぎて読むのに飽きるほどだった。初めのころの文面を読むと、どうもスポーツクラブで出会ったらしい。

写真もあった。その男と顔を寄せあつて撮ったものだ。目眩めまいがしたので一枚しか見ていない。僕と同じくらいの年代だと思う。すこし広くなった額だんに短い髪。アゴ周りの白髪混じりのひげ。色のうすい小ぶりのサングラス。サラリーマンにも公務員にも見えない自由業風の男だ。代官山だとかで売つていそうなTシャツにチェックのシャツ。妻の肩に回した腕には高級そうな時計が光っている。

頭に向かって血液が流れ込んでるのが自分でもわかった。手の先が痺しびれ小刻みに震え、口の中に苦い唾液が広がる。今、目の前に妻がいれば確実に手が出ていただろう。

友達に会うと嘘をつき、男と旅行に行つて帰つてきても、普段通りの顔で暮らしていた。僕に対する後ろめたさや罪悪感など、つゆほども見せなかった。その嘘の上手うまさをののしっていた。一睡もできぬまま朝になった。

「おはよう」